

第1章・ゆとり教育世代の子どもの文化

親の気づき
子のやる気

〇〇13



毎年5月の連休が終れば、不登校の相談が増えます。昨年も「今、休学届を出してきたところです」とお父さまが来塾され、「本人はもう一度高校に復帰し、大学を目指したいと言っています。私としては高卒も大学もこだわっていま

不登校

せん。ただ今の不規則な生活を打開してほしい」と。また別のお母さまは「小3のとき、この子がノートに書いた『いじめがつらい』という走り書きがショックでした。2年生の担任が嫌な先生で…」とご相談にいられました。

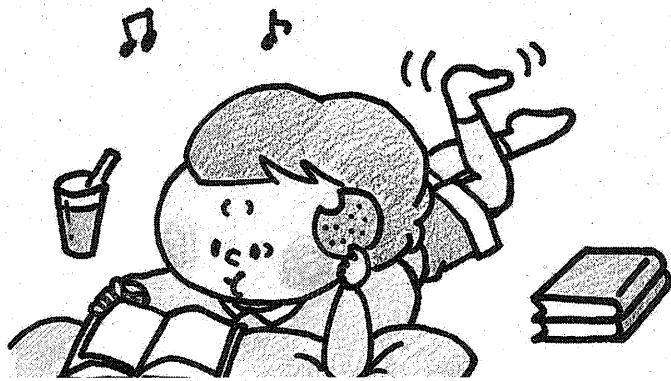
不登校問題はご家族にとつて、突然目の前に現れる大変深刻な問題です。来塾されて不登校のご相談には、

世代の異文化受容して

いつも3時間近くを費やしてしまいます。私は、不登校の原因は全く聞かず、可能な限り家族構成と時系列での詳細な経緯を伺います。そして、背景に潜む「子どもの文化」の問題、いわゆる過保護や過干渉という親子間の問題ではなく、安くして、便利で、しかも良質な生活の中で、普通の父親と普通の母親が子育ての過程で、省く

解答急がず、見守る心も

手間」の落とし穴に気が付いてますか」と話します。今の子どもたちに親を悲しませたい子どもはまずいません。親の心を追求し、活躍したいのです。しかし、経験不足で自信が持てず、達成感が乏しい日々の中、何を将来の目標としたら良いのか、どうも希望が持てないようです。親御さんは「やりたいうことをやらせたい」「この子には言いたく



by yoriko

も、いつもたわいない話題でした」と不登校を克服し、通信制高校から全日制の4年大学に今春見事に合格した女子が本音を話してくれました。親は子どもと接していても、「子どもの文化」を知らないのかもしれない。世代の異文化は親がまず柔らかな心で受容することが大切なのではないでしょうか。子どもの口実を許さず、解答を急がず、日々の失敗という取り組みの積み重ねを見守ってあげたいものです。

(畑山篤志学塾長)

長引く不しわ寄せは及んでいる、直結する「ちんとした日に必要な」スモ。家えにくく、「周囲が子」と敏感にな声が上がり、「食べ物介うねたる小の着衣は汚ていない様内で実際に「給食頼み」が通っていない職員は振り暮らす児童け。夏休み、職員がお休していたが、居していた児童の暮ら抱える母親ができな「この男児て特別視で員は強調す遅い共働き



文化

ニュース
なぜなに

生産(GDP)で日本を追いぬく見通しです。万博に参加する国が増えたのは、人口13億人の大きな市場を持つ「経済大国」中国との関係を深め、貿易や投資を拡大しようと考えているためです。



万博会場でも目立つ、約70歳の中国館。2月国・上海逆さまにしたような真っ赤な「中国館」大量の太陽光発電パネルを設置しています。内の交通には電気自